
ティータイム

ユリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティータイム

【Nコード】

N4302L

【作者名】

ユリー

【あらすじ】

再会しては離れなければならない、幼馴染の少年。

大好きな彼に会えるのは、毎年夏の間だけ。

だから私は、いつも思うの。早く、早く夏が来て欲しいって……。

海辺のとある街を舞台に、天真爛漫なお姉さんと実は腹黒な年下くんの葛藤物語。彼等の想いが通じ合うのは、いつの事やら。

0：メニュー（前書き）

現在8話目までの情報です。

0：メニュー

メニューは話数によって、随時追加されます。

ネタバレになりますので、十分ご注意の上、お好きなものをご賞味
ください。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

【桜井 千紗子】

自宅に併設されたカフェの、オーナー兼パティシエ。年は20歳。
甘いもの好きが高じて、それをちゃっかり職業にしちゃった人。基
本的に楽天家さん。

【桜井 紘樹】

千紗子の兄。カフェのオーナー兼シェフ。千紗子よりも5歳上。

【柏木 慎太郎】

夏になると帰って来る、千紗子の幼馴染。千紗子よりも年下で16
歳。千紗子は慎ちゃん、紘樹は慎太郎と呼ぶ。

【伊織さん】

街にあるコーヒー専門店の店主。桜井兄妹とは古くからの友人関係
にある。味はもちろんの事、彼の人柄（及び容姿）により、リピー
ターも多いらしい。千紗子は注文時、いつも国名を言って豆を選ん
でもらう。

【澤野 健斗】

千紗子とは同い年の友人。大手玩具会社の社長子息。

1：光（前書き）

メニューは話数によって、随時追加されます。

1：光

湯気を噴き出すポットから、ゆっくりと熱湯を注いでいく。こぼこぼと気泡が上がって、茶葉は軽快に踊りだした。そうして少しずつ甘い匂いが部屋を満たし始め、やがてそれは黄金色に染まっていく。私は満足気にティーカップを取り出すと、出来たての紅茶とパンケーキをそれぞれ見遣った。

「うふ、何とも美味しそうだなあ。」

堪らず声が洩れる。

だって。

ふわふわのパンケーキにハチミツ、更にはたっぷりの生クリームだよ？トッピングは苺とオレンジ。アールグレイの紅茶は早く飲んでよー！！って輝いている。

「さあ君達、すぐに美味しく食べてあげましょうね。」

忙しげにそれらを盆に乗せ、裏庭へのドアを背中で押し開く。

その先に広がるのは、一面の緑だ。

生い茂る豊かな木々、数多の花々が風に揺れ、楽しげな鳥達の囀りが聞こえてくる。手入れされたイングリッシュガーデン。ここまでするのに結構な時間がかかったけど・・・これは私の自慢の一つでもある。晴れ渡る空。降り注ぐ日差し。目に映るものすべてが眩しく輝いて、思わず目を細めてしまう。

「絶好のティータイム日和よね。」

だらしなく頬が緩むのを隠しもせず、私は庭の真ん中に置かれたテーブルに盆を置いた。エプロンのポケットから花柄のクロスを取り出し、ふわりと宙で広げる。クロスは柔らかな風をはらんで、パタパタと音を立ててはためいた。テーブルに敷いて椅子に腰かけ、いつものように両手を合わせる。

「では、いったただつきまーす」

右手にナイフ、左手にはフォーク。よいしょよいしょと前後に動かして、一口サイズにパンケーキを切る。もちろん忘れずにたつぷりとクリームも添えた。滴るハチミツが陽光を集めていく。

ああ、神様……至福の時間をありがとうございます。

無意識にごくつと喉が鳴る。たつぷり口を開けて、パンケーキが近づく。

大きく一口。もぐもぐもぐもぐ……

「美味いつ!!」

冗談じゃなく涙目、頬に手を添えてうつとり気分。やっぱり最高です、というか私って天才?こんな美味しいパンケーキ、絶対誰にも作れないでしょ。ぱくぱく、むしゃむしゃと咀嚼して、紅茶も堪能する。

ああ……幸せ。

今、断言できる。きつとこんな時間を過ごす為に、私は自分の心臓を働かせているのだと。ドクドクと脈打つ私の心臓は、甘いものを

摂取しないと機能停止するね、間違いなく。鼻息も荒く貪って、1枚2枚とパンケーキがお腹の中へと納まっていく。口の端に付いたシロップも、最後にペロリと舐めた。

「はあ、ご馳走さまでした。」

恭しくお辞儀。ひとしきり味わった紅茶を盆に戻し、両手を上げて伸びをした。ふと空を見上げると、澄んだ青空にうず高く重なった雲があった。

「ああそっかあ、もう夏が近づいてるんだね。」

春になったと思えば、すぐに季節は移り変わる。暑い日々が始まったら、また彼がここへ、戻って来るんだ。

「慎ちゃん、元気にしてるかな。」

再会する度に、いつもビツクリしてしまう。すくすくと、まるで植物の様に成長する彼に。無邪気なくせにちよっぴり意地悪。そのくせ両親に似て賢くて、可愛い。文句の付け様が無い愛らしい顔と柔らかな表情は、大勢の大人達もイチコロだ。

『ちーと、ずっといっしょがいいの。』

離れる時はいつもそう言っていた、年下の少年。兄の大きな手のひらとは違う、彼が持つ独特の手の感触は、繋ぐと何故か心が救われる様な気さえする。私は彼が、心から好きだった。

早く夏が来れば良いのに。

慎ちゃんと会って・・・いろんな話がしたいなあ。そうだ、このパンケーキも作ってあげたい。桃とかプラムとか、旬のフルーツもいっぱい添えて。たぶん、きつと喜ぶ。あのとろけちゃいそうな可愛い笑顔。『ちー』と呼んではぽこつと出来る、右頬のえくぼが早く見たい。

「何だか、楽しみだな。」

体中がぽかぽかと温まり、エネルギーまで湧いてきた。いつもそうだ。慎ちゃんを思うと、元気になれる。

「おーい、ちさこー」

家の奥から、兄の呼ぶ声。

「はーい、今行きまーす！」

4時間後には開店だ。そろそろ残りの仕込みを始めなきゃいけない。すっかりキレイになったお皿を片づけて、私は大急ぎで戻っていく。さて、今日はどんなお客様と出逢えるだろうか。想像が膨らんで笑みが零れた。何だかスキップでもしたくなる、今日はそんな心地の良い始まりだった。

2：兄と妹、そしてホットミルク（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

2：兄と妹、そしてホットミルク

「ありがとうございました。」

お客様を笑顔で見送って、ドアを閉める。

時間は午後6時。これで今日も店じまいだ。

「お疲れ様。」

「お疲れ様でした、お兄ちゃん。」

安堵から、互いにほっと息を吐いた。

店内の片付けをして、食材のチェックを済まし、ようやく一日の仕事が終わる。

「お兄ちゃん、はいどうぞ。」

作りなおしたハーブティーを渡すと、新作メニューに頭を抱えていたコウ兄が顔を上げた。

「ありがとう。」

わざわざ私の目を見てからお礼を言う。こういう律儀な所、我が兄ながら「ちゃんとした人」だなあと思う。親の躰によるものなのか、それとも性格なのか……。いや、両方なんだろうな。コウ兄を横目に、ふうふうとカップに息を吹きかけて一口飲む。

「美味しい、今日はカモミールか。」

「そっだよ、明日はお休みだからね。」

頑張った身体を労わる様に、カモミールの香りと苦みがゆっくりと沁み込んでいく。

明日は、何をしようかな……。まず起きたら庭の手入れをして、街に出て買い出し、それからええっと。本屋さんにも行こうか。小説と絵本の新刊、最近チエックしてないなあ……。

ぼんやりと妄想に耽っている

「千紗子、良い物をやろうか。」

そう話し掛けられて兄を見た。コウ兄はさつと何かを差し出したかと思うと、すぐにまたそれを隠してしまった。一瞬だけ見えたのは薄い紙きれ。……。どうしたんですか、一体。

「なあ、何だと思う?。」

いかにも誘う様な、からかいの眼差し。コウ兄がそういう事をするのは珍しいので、私は問いよりもそちに驚いて目を丸くした。いっだってこの人は、私に対して誠実で優しい。まあ、私にというか万人にも優しいけれど。

「ほら、早く知りたいだろう?。」

だからさつさと当ててみる、と言わんばかりの表情でコウ兄が笑う。あのねえ……。そんなの一瞬見せられただけじゃ分からないですよ。当てっこなんて無理ですからね、ム・リ！無言のままぶっつと頬を膨らませると、コウ兄はすぐにいつもの優しい表情に変わった。

「そんないじけるなよな。ほら、これをずっと待っていたんだらう?。」

改めて渡されたのはやはり紙だった。でもただの紙では無くて、私にとってみれば幸せへと続く魔法のチケット。当然のごとく顔には喜びが広がる。現金なものだよね。たったこれだけで、年甲斐も無くはしゃいでしまうなんて。

「うそつ、しんちゃん!？」

声が跳ねる。しかもデカい。女子としては間違いなく失格だ。でも、そんなの今は関係ない。

「そつだよ。良かったなあ千紗子、今年はどうやら早いらしい。」

コウ兄と違って、私はその『魔法のチケット』もとい、慎ちゃんから届いた絵葉書から目を離せずについて、そのままコクコクと頷くだけだ。情けないけどこれが精一杯。

『久しぶり、ちー。』

葉書はいつもの書き出しから始まっていた。続く文章も素っ気ないけれど、そこには丁寧に書かれた文字があつて、美しい筆跡は確かに彼の成長を物語っている。去年のお便りは『忙しいから行けない』だった。けれども今年は違う。

『夏になったら、すぐに行くから。』

どうしよう。すごく嬉しいよ慎ちゃん。

たぶん一生懸命選んでくれたのだろう。綺麗な花の写真が付いたとても素敵な絵葉書は、すぐに私の部屋のコルクボードに飾られる事

になった。カレンダーの隣にしっかりと、まるでカウントダウンを待つように並んで。

その日の夜、私は遠足前の子供みたいに寝付く事が出来ずに居た。本を開いてもそわそわしてしまい集中できないので、仕方なしにブランケットとホットミルクを持参して、庭に出る。春の星座が瞬く天を、ウッドチェアに揺られながら仰いでみた。ホットミルクと欠けた月、そして約束された夏。キラキラと星が輝く度に「良かったね」と言われてるみたいで、すごく気分が良い。結局私は、2時間近く庭でぼーっとしていたらしい。終いにはコウ兄に「風邪ひくぞ」って怒られてしまった。

こんな風にただ無邪気に、慎ちゃんを待っているだけの毎日が今年最後になるなんて。この時の私は少しも気づいてなんかいなかった。いつまでもぬるま湯にばかり浸かっていると、人は弱くなるのだと直後に痛感する事になる。

3：雨のち晴れ、時々曇り（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

3：雨のち晴れ、時々曇り

お気に入りのワンピースを着て、これまたお気に入りの帽子を被る。

「おにーちゃん、伊織さんとこに行つて来るねー！」

振り向いてヒラヒラと手を振る。コウ兄は声を出さずに視線だけで『気を付けてな』と言った。はい、気を付けます。それじゃあ行つて来るね。

自転車をこいで自宅兼仕事場の門を出た。青々とした木立を抜けて紫陽花の咲き乱れる広場を越える。潮風に時々飛ばされそうになる帽子を押さえながら、私は街へと続く坂道を下りて行つた。

「気持ちが良いなあ。」

梅雨の合間にようやく見え始めた青空。そのすつきりとした空気は、夏の到来を予感させる。

「あ、おばちゃんこんにちはー！」

坂から平坦な道へと変わり始めた頃、人や店の活気づいた気配が増える。すれ違う顔馴染みに挨拶をしながら、さらに力を込めてペダルをこぐ。わざと遠回りしてしばらく風の心地良さを味わった後、目的地にようやく着いた。キョットとブレーキを踏んで、裏口に寄せ、自転車を止める。少し乱れたスカートを直し、窓ガラスに映る自分を確認しながら、帽子を胸に抱えて髪形を整える。よし、抜かりはないはずだ。

「こんにちはー」

店のドアを開くと、いつものようにからんからんとベルが鳴った。

「いらっしやい。」

そしていつものように、店の奥から伊織さんが現れる。

「こんにちは、伊織さん。」

「こんにちは、千紗子ちゃん。」

どうぞ、としなやかに席へと誘導され、私は素直にそこへ座る。馴染みの席のカウンター。上目遣いで伊織さんを盗み見ると、しっかりと目があってしまった。不意打ちに胸も鳴る。

「久しぶりだね。」

独特の甘い声だ。姿かたちも格好良いのに、声まで色気あるなんて卑怯極まりない。まったくもう、相変わらずなんだから伊織さんてば。眩しい笑顔をそんな惜しげも無く、簡単に見せてしまわないで。うっかり惚れてしまいそうです。

照れて紅くなった耳を、隠す様に擦る。心なしか鼓動も早まった気がしたけれど、いや、これ以上は考えない事にします。

「今日はどうする？」

「えと・・・じゃあ、ドイツで。」

「かしこまりました。」

さりげなくウインクして、伊織さんは準備を始めた。どんな仕種も

すごく優雅で、普通なら厭味ったらしく映る様な事でも、伊織さんがすれば何もかも自然だった。その紳士っぷりは、黒と白で統一されたギャルソンの衣装を着る事で、更に箔が付く。どうやらコウ兄ちゃんの話によると、この雰囲気は外国で身に付けたものらしい。それが嘘か本当かは分からない。けど少なくとも私は、ここに立っている時の伊織さんはいつだって、カツコイイなあと思ってる。

「はい、どうぞ。」

目の前に出されたのはコーヒーと、1つのチョコプレート。私はカップに少しだけ顔を近づけて、香りをかぐ。

「うわぁ・・・うん、良いね、美味しそう。」

そっとカップを持つと、目を閉じて・・・飲んだ。香ばしい香りが一気にのどから鼻を抜ける。まったくもう、悔しいなあ。やっぱりとても美味しいじゃない。

伊織さんを見てみると、口許だけを少し上げていた。完全無欠の勝者の笑みだ、ほんっと憎たらしいなあ。

「気に入って頂けたようですね？」

「うん、すごく良いねコレ。」

「ありがとうございます。」

「この苦みだったら、レモンケーキが食べたくなる。」

「レモン？」

「そう、レモンよ。」

私は会話をしながら、頭の中ではレシピを練っていた。レモンを乗せた、黄色いケーキ。酸っぱくて、サッパリした、夏に食べたいレ

モンのケーキ！

「ふふ、次の課題が決まったかも。」

「それは良かった。完成したら、食べに行くよ。」

「うん、楽しみに待っててね。」

「待ってるよ。」

やがてお客さんがちらほらと顔を見せ始めたので、伊織さんは私の傍を離れた。持って来ていた本を開き、小一時間ほどそうして過ごした後、私はカウンターにお金を置いてお店を出た。伊織さんに会釈をしたら、またしてもウィンクされる。

ここから違う、ドキドキしなくて良いからね心臓よ。

お風呂上がりの犬みたく首をぶんぶん振って、私はまた自転車に乗った。顔馴染みに挨拶して、立ちこぎしながら坂を上がり、紫陽花の横を通り過ぎて・・・。

『ピンクよりもムラサキよりも、青いアジサイがボクは好き。ねえ、ちーは？』

不意に思い出し、私は動きを止めた。自転車を降りて、じーっと紫陽花の群生を見つめる。

『ねえ、ちーは何色が好きなの？』

私は・・・そうだなあ・・・。

唇にそっと手を当て、

「慎ちゃんと一緒かな。」

ひっそりと紫陽花に囁いた。

結局、その後は自転車には乗らずに押しながら帰った。おかげで行きよりもゆっくりと紫陽花を見れたし、道の真ん中を横断中のカタツムリを避難させる事も出来た。

それからちょうど1週間後、梅雨明けのニュースが流れた。今年の夏がようやくやく始まる。

4：待ち人來らず（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

4：待ち人來らず

ベランダで洗濯物を干しながら、何度も何度も右斜め前方を見る。

視線の先には三角屋根の白く大きな家。

その家はまだ、カーテンが閉められたままだ。

ふうーっと溜め息が出る。これがあと・・・いつたい何日続くのだろう。

燦々と照る日差し、鳴き始めた蝉の大合唱。

青と白のストライプシャツに、ポニーテールの髪が嫌になるくらい纏わりつく。

「あつついなあ・・・」

太ももまでスッキリと晒したミニのジーンズでも、やっぱりどうして死ぬほど暑い。

「あー何か、かき氷とか食べたいし。」

濃厚ミルクのアイスクリームとか、食べたいし？キンキンに冷えた麦茶をぐびっと飲みたいし？プールに思いっきり飛び込んだりとか、海でみんなとはしゃいだりとか・・・それに、

「慎ちゃんに早く、会いたいし・・・。」

そして恨みがましく、豪邸を睨む。

この所、洗濯物を干す時の私の習慣がこれだ。

我が家からご近所さんである「柏木家」のカーテン。それがいつになったら開けられるのか、その事ばかりを気にしている。

「カーテンが開く」柏木家の坊ちやまのお帰り」「なわけであり、さらに言うなら。

「柏木家の坊ちやまのお帰り」慎ちゃんのお帰り」なわけである。

「今年は早くなるって言ったじゃない。慎ちゃんの、嘘つき。」

小さな火種がパチパチと音をたて、私の心を苛々させていた。

さて……私の住むこの街は、世間で言う所の避暑地である。裕福な方々の所有する別荘が連立している。普段はとっても静かなこの街も、夏ともなれば颯爽と高級車が通り抜け、麗しきご婦人方や目を引く素敵な男性が、街を闊歩する。その様子は本当に華やかだ。たまたまこの場所に、両親が土地と家を残してくれたから目にする事が出来た光景。天上人たちの華麗なる日常。そうしてひとしきり夏を満喫すれば、天上人たちは元の地へと帰っていく。

まるで月に戻るかぐや姫みたいに。残された私達は……彼等の美しさに目を奪われて嘆くだけ。ああ、また必ずや帰って来ておくれ！そう悲しんだ竹取の翁の気持ちが、私にはよく分かる。いやいや……冗談じゃなく、ほんとにね。

洗濯かごを掴み、ベランダから1階へと降りる。キッチンへと移動して慣れた手つきでエプロンを着ると、オープンに顔を寄せた。オレンジ色の光の中、マドレーヌがぷくつとお腹を膨らませているのが見える。香りも悪くない……うん、たぶん美味しいはずです。次に冷蔵庫を開け、仕込んでいたレモネードを味見した。

おおっ！これはおいしいっ！！

出来あがりニンマリとほくそ笑んで、仁王立ち。やっぱり、私って天才だわ。・・・誰も言ってくれないから、自分で言うしかないってのが悲しいけどね。

その時、ぼーんぼーんと仕掛け時計が鳴った。羽を動かすフクロウが、開店までちょうど2時間だと知らせる。さあ、今度は私の準備を始めなきゃ。頭の中で、残り時間のタイムスケジュールをちゃちゃっと組む。よしと気合を入れ直して、私はすぐさま動き始めた。この日、思いがけずに再会を果たすまで・・・あと2時間と35分。

5・・・おかえり（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

5：おかえり

ガラスケースに数種類のスイーツを並べ、今日も宜しくと心の中でご挨拶。きつちりとエプロンの紐を結び直して、準備完了だ。

「開けようか、千紗子。」

「はい。」

木製プレートに書かれた文字を、「CLOSE」から「OPEN」に替えた。

今日も店が開く。

その日の第1号は、この季節になるといつも現れる、老紳士だった。

「あらおじ様！おはようございます。お帰りになってたんですね。」

「いやぁ千紗ちゃん！すっかりお姉さんになって。驚いたな。」

広げられた腕に自然と抱きつき、再会を喜ぶ。

「おじ様、私だってもう20歳です。大人ですもの、お酒だって飲めるんですよ？」

「ハタチだって？そーか、千紗ちゃんもそんな年になったか。初めて会った頃はちっちゃな女の子だったのになぁ。」

たしかこれ位の・・・なんて言うては手のひらを膝まで落とし、やんわりと笑う。

「そーかそーか、ハタチか。なら千紗ちゃん、うちの孫の嫁さんにどうかな？」

「ええ！？お嫁さんなんてそんな・・・おじ様のお家に嫁げたらそりゃあ幸せでしょうけど。でも、私にはとても勤まりません。」

だっっておじ様の家は、誰もが知ってる有名な会社を経営しているから。

「それに何より・・・私がここを出て行ったら兄が寂しがりますから、ねっ？」

ちらりとコウ兄を見ると、照れたように顔を逸らされた。あらま。これはもしかしたら、凶星だったかもしれないな。

「そうだねえ。千紗ちゃんが居なくなれば、紘樹くんが悲しむ。」
「私もやっぱり寂しいですから。」

私達は2人して眉をハの字に下げた。

「だからおじ様は、これからもここに遊びに来て下さいネ？私達はいつでも待ってますから。」

「ああ、そうさせてもらうよ。実際、君たちの作る料理は美味いから、通わずにはいられないさ。」

「ありがとうございます！」

そうして互いの近況を報告し合いながら、兄特製の「きのこパスタ」をおじ様が食している時だった。チリリンっと入口のドアベルが鳴ったので、私は振り向いて条件反射に声を掛けた。

「いらっしやいませ！」

やって来たお客様を見た途端、完璧だったはずの営業スマイルも固

まった。そこに居たのは、どんぐりみたいな目とあご髭、背が高いというよりは体格が良くて、鳥の巣頭みたいなパーマの男だ。何故だか分からないけれど、全身葉っぱまみれになっている。

「千紗！！会いたかったよぉー！」

猛ダツシュで駆けつけそのままぎゅっつと抱き締められる。その頃にはもう店にはおじ様以外にもお客様が居て、皆さん例に洩れず目が点になっていた。

いやいや、当然ですよ。いきなり現れた客が、従業員に抱きついてるんだもん。普通に考えればセクハラでしょ？さっきのおじ様としたハグとは、天と地の差ですから。その異様な光景の中でおじ様は苦笑い、兄は呆れ顔、当の私は怒りでしかめっ面だ。

「千紗ー！ずっとずっと会いたかったよ。俺の想像通り、やっぱり可愛くなってるーいや、想像以上だよ！？すごく綺麗になった。もう・・・どれだけ今日という日が待ち遠しかったか。」

ちよつとちよつと、あごヒゲが痛いつてばあー！！
擦り寄せられた頬を両手を使い必死に引き？がして、私はそいつの身体を押しやった。

「やめなさい健斗！いきなり何なのよ、もう！！！」

啞然としていたお客様にお詫びをして、私は健斗を無理やり引っ張って連れ出すと、説教を始めた。

「ちゃんと状況を把握してから行動してって・・・何度言ったら分かるの？」

「ごめん。お願いだから許してよ、千紗。」

「健斗はさ、謝ったら何でも許してもらえるって、甘く見てるでしょっ?」

「そんな事ないよ!」

「いや、そんな事ある!だってこれで何回目?突発的に抱き付いて来る癖、私直せって言ったよね?」

「だってそれは」

「言ったよね!?!」

「……………言いました、ごめんなさい。」

俯いて肩を落とす健斗を見て、私はハアァと深く息を吐き出した。さっきまでの笑顔全開の彼と、今の悲壮感漂う彼が、同一人物とはとても思えない。もう……………何でそんなに落ち込むのよ。ほんとには長い付き合いだから、分かっているんだよね。これが、健斗のやり方なんだって。感情表現を隠さない、いつでも真っ直ぐがモットーな人。単純に会えて嬉しかったから、抱きついただけ。そして怒られたから、反省してる。何でも素直に受け取ってしまう。私と同じ年で、しかも大きな玩具会社のご子息だとは……………いつまでも信じられない。

「分かった……………もう良いよ、健斗。」

そつと肩に手を置いて、叩く。

「私も、健斗に会えて嬉しいから。」

「ほ、ほんとに!?!」

顔を上げた健斗の、一瞬で変わる表情が笑えた。

「うん、嘘じゃないよ。健斗、久しぶりだね。」

「ち、千紗あー!!」

またしてもいきなり抱き付かれて、私は可愛げも無く「うぎゃっ！」と声を上げた。

でも・・・ほんとの災難はそれだけじゃなかった。店に戻ろうと振り向いた私達の前に、ずつとずつと会いたかった人が立っていた。すらりと伸びた手足だとか、大人びた顔立ちとか・・・彼の姿がビツクリするぐらい変わっていて、私はその時、声なんてとてもじゃないけど出せなかった。

いや、違う。本当はそれどころじゃない。

私の心は苦しくて、何だかとても切なくて。どうしてあの「慎ちゃん」が今まで見た事の無い様な眼差しで、私を睨んでいるかが分からなくて・・・ただ怖かったんだ。その痛みを慰める様に、風に吹かれた木立がさわさわと揺れ始めた。

6：芽生えの疑問符（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

6：芽生えの疑問符

無言のまま立ち尽くしていたら、彼がゆっくりと近付いてきた。一歩一歩踏み込む足と同時に、私の脈も速くなっていく。あんなに会いたいつて思ってたのに。なんだか今は、すごく……

「久しぶり、ちー。」

声が降って来た。

あつという間に目の前に立たれて、愕然とする。何これ。何でこんなに伸びてるの。随分と背が伸びたとは思ったけど、私よりもおつきなくなってるじゃない。嘘でしょ、ていうかほんとに、この人慎ちゃん？

「ねえ、ちー。」

混乱する私とは正反対に、慎ちゃんは屈託なく笑う。その笑顔はさきほどの厳しい表情とは打って変わって、面影の残る優しいものだった。きゅっと上がった口角。澄んだ瞳。そして頬にえくぼ。ようやく自分の知る慎ちゃんに出会えた。その安心感に、心の中でぽつと灯りがともる。

けれどもそれを遮る様に、慎ちゃんがこちらに人差し指を向けた。

「ちー、この抱き付いてる人、だれ？」

指差す先には腕を私の背に回す熊男。そうだった！私は抱きつかれたままだった。今更ながらに気付いてしまい、嫌がる健斗に無理や

り腕を伸ばし距離を取る。ちょっと、コラ、離れなさい！と健斗とのやり取りの数秒後。

「えーっと。この人はね、仲良しのお友達さんです！」

と、はつきり言い切った。説明不十分な気もしたけれど、「この人すごく甘えん坊で、抱き付くのは習慣なのよ。」なんて事言っても、今の健斗の風体じゃ納得出来そうにも無いから言わなかった。だって可愛さの欠片も無いし。

「仲良し・・・ふうん、そう。」

慎ちゃんは呟き、私の横に居た健斗を見る。対する健斗と言えば・得意の人見知りを大々的に発揮しているのか、慎ちゃんが現れてからというもの、様子を窺ってるのか一言も口に出さない。挨拶もなし。ちよっとちよっと健斗さん、社会人としてそれはどうかと思うんですけど？

「それよりも慎ちゃん、えっと、その・・・元気だった？」

「元気だよ。むしろここにくる為に、充分体力付けてきたくらいに。」

「体力・・・え？ここにくる為に体力付けるの・・・？」

「うん。」

何だか、意味がよく分からないけど。だってここは避暑地だから、普通は身体を休める所なのに。

「だって、ちーと一緒に過ごすんだから。体力あった方が色々楽しめるでしょ？」

そう言って再び笑顔が広がる。しかもとびきり上等で、きらりんつと効果音が付きそうなほどの、眩しいくらい綺麗な笑顔を。たぶん女の子達がこれを目の前にしたら、きゃあって騒いでしまうよね。ていうか普段、確実に騒がれてるよね？だってこれって、いわゆるキラースマイルってやつでしょう？

「ちょっとちょっと慎ちゃん、あなたいつの間になんなスキルを・・・。」

確かに、もちろん昔から可愛くて綺麗な男の子だったけれど、今の慎ちゃんは何ていうか・・・こう、テレビや雑誌のモデルさんみたいな感じだもん。何だかすごく、キラキラして見える。しかも何かオーラ出てますよね。何ですか、こう、男前だけが放つ素敵オーラみたいなもの？ここに居るのも信じられないというか、まるで違う世界の人って感じだよ・・・。

そこまで思って、はっと気付いた。

あ、そっか。そうだよ。そんなの当たり前じゃない。だって慎ちゃんは今・・・天上人なんだもの。忘れてちゃいけない。私と慎ちゃんじゃ違うんだよ。いつまでも昔みたいに、一緒には居られないんだ。まだしばらくは、大丈夫だと思っただけ・・・。

「もうすっかり、大人になってしまったんだね。」

私の呟きで、慎ちゃん表情が少しだけ翳ったのを、もちろん気付くはずも無く。

「あの、取り合えず、2人とも中に入ろう？ね？」

気分を変えたくて店へと促そうとする私の手を、強く掴んだのは健斗だった。手首から手のひらへと移動して、最後に指をきゅっと握る。いつも健斗がする、さよならの挨拶だ。

「千紗、俺は帰る。」

「ええ？もう帰っちゃうの？」

私は首を傾げて健斗を、そして慎ちゃんへ視線を移す。けれど目が合ったのも束の間で、慎ちゃんはすぐに私の左手へと視線をずらし、その目をすうつと細めた。

「ごめんね千紗、今日はちょっと出直す。また、遊びに来ても良いよね？」

「何言ってるの、当たり前じゃない。さっき言ったでしょう？健斗に会えて嬉しいって。」

「……………うん、ありがとう。大好きだよ、千紗。」

握り合った手をブンブンと上下に振られ微笑むと、そのまま健斗は帰って行った。健斗、何か変だった……………？ってか、健斗はいつも変だけど。私がぼかんとしたまま、どことなく元気の無い健斗の背中を見送っていると

「あのクマみたいな人、本当はちーとどういう関係？」

真後ろからいきなり声を掛けられ、ビクツと身体が竦む。恐る恐る振り向けば、腕組みした慎ちゃんがじいっと私を見下ろしている。あのう、何だかちよっと不機嫌に見えるのですが、どうしたのでしょうか。あ、もしかしてお腹すいたのでしょうか。

「ホントも何もお友達ですから。澤野、健斗っていうのよ。」

「サワノ。」

慎ちゃんはそう言ったきり、俯いた。

『大好きとかって……けど、随分フランク……抱き付いたりするのも……ちーには……友情の証……まったく……嫌になるくらい低い防御壁だな……どうなってるんだ。全然話が違っじゃないか。』

何やら小声でぶつぶつ言ってるけど。

……あ、そっだ！

「いきなりで驚いちゃったけど、一体いつ着いたの？」

「ついさっきだよ。一番にちーに、会いたかったからさ。」

会いたかった

その待望の一言は、さっきまでの緊張やら何やらを吹っ飛ばしてくれた。

「私もだよ慎ちゃん！ずっと待ってたんだからね！？ずっとずっと会いたかったのよ、慎ちゃん！」

私は思いつきり彼に抱き付いて、背中をバンバンと叩き、頭を何度も撫で、ぎゅむぎゅむと身体を締めつける様に抱き、今日一番の抱擁を交わす。

「・・・・・・・・ちー。」

背に廻された手の感触は、昔よりもずっと固くて大きかった。肩に置かれた顎とめくもりも、全然知らないものだ。それに、私を呼ぶ吐息交じりの声が耳に掛かって・・・・爪先から頭までうずうずした。

身体を離して、見つめ合う。

「お帰りなさい、慎ちゃん。」

「ただいま、ちー。」

当たり前の様に彼から差し出された左手に、私はゆっくりと右手を結ばせた。本当はね、手を繋ぐ事に一瞬だけ、躊躇ってしまったんだ。可笑しいよね？自分からは抱き付くのに、差し出された手には戸惑うなんて。自分でも何故かは分からない。きつと、久しぶり過ぎて距離感が掴めなくなったのよね？なんて無理やり納得させて、大きくなった手を強く握った。

7：オムライスと密約（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

7：オムライスと密約

「でかくなるだろうとは思ってたけど、さすがに予想以上だなあ。」

カウンターに座る慎ちゃんを見ながら、ははつとコウ兄が笑う。それにつられて、私も深く頷いた。

「だよな。私だって最初誰かと思ったもん。ちょっと見ただけじゃ慎ちゃんだって分からないよねえ。」

しみじみと言う私を慎ちゃんはちらりと見たかと思うと、無表情のまますぐに目を逸らした。そして、出来たてのオムライスのてっぺんにスプーンを当てると、右から左へすうーっと裂いていく。その瞬間、ふわふわの卵は形を崩していき、花びらが開く様にチキンライスに覆われた。

「うわー。すごい美味そう。」

湯気と匂いが唾を誘う。待ちきれない様にさくつとスプーンを差し入れて、口の中へ。その顔がすぐに、ふにゃんと柔らかさを増した。私は、慎ちゃんの次の言葉の予想が付いた。

「美味しい。」

でしょうか？私も見ているだけで食べたくなっちゃうよ。慎ちゃんは口に運ぶ度に贅辞の言葉を告げて「うん、やっぱりコウ兄のオムライス最高。」と頷く。素直に嬉しかったのだろう。コウ兄は挨拶代わりに、片手を上げた。

「帰って来たんだなーって思うよ。これ食べるとさ。」

そうよね。慎ちゃんは帰って来ると、必ずコウ兄のオムライスを食べる。次に私の作ったプリンを食べ、2人で街へ下り、そして伊織さんに会いに行く。それがいつもの私達の、夏の始め方だ。

「……はあ、大満足だ。」

オムライスを一粒残らずきれいに食べ終わり、ご馳走さまと頭を下げる。さすが成長期。あつという間にお皿は空になった。それを見て私も「次は自分だ！」と意気込んだ。慎ちゃんの期待を裏切るべからず。楽しい夏を過ごすには、これを失敗してはいけません。

「よし、じゃあちよつと待っててね慎ちゃん。すぐにプリンの準備をするから。」

「うん、ありがとう。」

私は渾身の作品を取りに、奥へと引っ込む。冷蔵庫に眠るプリンさん、さあ、貴方達の出番ですよ。

彼女の背中を見ながら、久々に自分の心が満たされているのを感じた。いつからだろう。戻って来たという実感を得るのは実家ではなく、この小さな店に変わったのは。入った瞬間に広がる、明るい店内の雰囲気。各テーブルには季節を感じる様な素朴で、けれど可愛らしい野の花が飾られていて、心まで柔らかくしてくれる。手入れの行き届いたリネンのテーブルクロス、シンプルな食器類、そつと控え目に掛けられた風景画。すごく些細な事も、一生懸命に彼女が考え、選びぬいて形にしてきた物たちなんだろうな……とセンスを

感じる。この圧倒的な居心地の良さに慣れた頃に僕は、また戻らなきやいけなくなる。それがいつも嫌だった。

「なあ、慎太郎。」

コウ兄の呼びかけに、僕は顔を起こす。

「今のお前を見たら、伊織もきつと驚くと思うよ。」

意味ありげな視線。彼女には決して見せようとしない『不躰な冷ややかさ』が、まっすぐに僕へと絡んできた。この店の唯一の欠点はこれだった。

「へえ、無駄に男前になりやがったなあ……無性に腹立つわ。」

僕は無言のまま、コウ兄を見つめた。そう簡単に挑発には乗らないいや、乗っちゃいけないんだ。でないと大きなしっぺ返しを食らうから。そうやって何度酷い目に合ってきたか、数えたらキリがない。この人は傍から見れば温和で優しい草食男子な感じだけれど……でも、僕は知っている。この人の本性を。苦労した分だけ周囲への洞察力に優れていて、冷静に物事を判断する策略家。自身の迷惑の為だったら、虎視眈々と相手を追い詰める肉食獣タイプ。それを上手に感じさせない所が、コウ兄のコウ兄たる所以だと僕は思っている。

「お前……以前にも増して可愛げが無くなったよなあ。」

ちーとよく似た丸っこくて大きい眼。澄んだ白の中には、こげ茶色の瞳。この瞳に僕はどうしようもなく弱いのを、もうずっと昔から自覚している。もちろんそれを、コウ兄だって知っている。知って

いてこんなに目を合わせてくるんだから、ほんと容赦ないよね、まったく。

「お陰さまで。何年もコウ兄達に苛められた結果かなあ？いたいけな仔羊も少しは成長出来たのかもね。」

「仔羊？お前よく言うな。オオカミのクセにヒツジの皮を被ってただけだろうが。ほんと性質が悪いよ。しかもサイズが合って無くて俺には丸見えだったからな。さつさと手懐けてたら、こんな面倒な事にはならなかったのに。やっぱ鍋に入れて喰っちゃえばよかった。ほんと厄介だよ。」

「それはお互い様だと思うけど？ていうかいい加減、その二重人格やめたら？ちーだって気付いてるよたぶん。」

「馬鹿だろお前。俺はその点に関しては完璧だからな。お前と違って簡単に尻尾を見せない自信はあるんだ。」

「あーそうですか。」

「そうなんです。」

こんな風にひっそりと、彼女の居ない所でバトルする。いがみ合うのはいつもの事で、それはもう仕方がない。だって、守護者と捕食者という正反対の関係である僕達は、互いに譲れない「想いの根っこ」は変えられないから。でも、それを愉しんでいる自分達が居るのも、事実だ。

「伊織にもちゃんと、顔見せるよ？」

コウ兄はカウンター越しに手を伸ばして、無造作に僕の頭を撫でた。この兄妹は、人の頭を撫でる事がどうやらとても好きらしく、昔から何かというとすぐこうする。ぐしゃぐしゃと、まるで自分が飼った犬にでもなった様な気にさせる大きな手。この手にどれだけ憧れているか、きつとコウ兄は知らないだろう。

「うん、後で行くつもりだから。」

「そうか・・・まあ、あれだけきっぱり宣言したんだ。伊織にも厳しくチェックされてくれば良いさ。」

「そうやってコウ兄は、面倒くさがってすぐに見放すんだよね。でもそれって本当は、コウ兄の役目なんじゃないの？」

「お前分かって無いなあ。俺はどんな奴でも嫌だから、判断とかする意味も無いんだよ。その点、伊織はフェアだぞ？ 散々見極めた拳句にばっさり切り捨てる。」

「うわー！！どっちにしたって駄目じゃん。もうこの人達ほんと最低。」

「ははは、何言ってるんだよ今更。」

そう、確かに今更なんだ。もう何年もこの調子。僕は夏になればこの街へ来て。この店でオムライスとプリンを食べ、男として尊敬する2人の先輩に色々な事を教わり、そして彼女に恋をする。夏が繰り返される度に、僕は同じ道を辿っていた。それはとても幸せで、だけど満足する事は無い夢の休日。けれども僕は、これを夢で終わらせる気なんて無い。その為には、進む歩幅を早くしなければ追いつけないのだと気付いている。掛け足でも良いから進め。無理やりでも距離を縮める。しなやかに、巧妙に。檻の中へと困ってしまえ。交わされた密かな契約を、僕は絶対に実現しなければならぬ。どんな犠牲と苦勞に代えても、成功報酬は逃せない。

「慎ちゃん！お待たせしました！！」

パタパタと聞こえて来た足音に、僕は耳を澄ます。手に抱えたプリンと、そして甘い誘惑。あどけなく笑っているけれど、たまには僕だって、ちーの別の表情を見たいんだよねえ、ちー。僕は君を・・・
ずっと自分だけのものにしたかって考えているんだ。君が僕に望

む事と、僕の望みは似ている様で、全然違う。女の子はさ、大切なものを宝箱に仕舞って眺めるだけで満足するかもしれないけれど、男は違うんだよ。大事に大事に仕舞っても、時々撫でたりつついたり・・・大切だからこそいじめたりするんだ。泣いてる顔や困ってる顔、僕のせいで表情を変える、そんな君が見たいんだ。だからもしかして僕の望みは、君を苦しめる事になるかもしれない。今までは我慢していたけれど、そんなのもううんざりなんだ。だからさ。優しいだけの僕等は、もう終りにしよう。

8・・・甘言(前書き)

メニューは話数によって、随時追加します。

「どうしたの？」

私が聞く。右方向に顎を上げて、手は繋いだままで。

「ううん、何でもないよ。」

そして彼は応える。さっきよりも強く握った手。感触を確める様に慎ちゃんは、きゅっと力を込めた。すっかり遅くなった横顔にも、笑えばちゃんとえくぼが出来る。ただそれだけで、心が和んだ。

夕暮れ時の坂道を、私達は並んで歩いていった。特に会話をするでもなく、ただその場に流れる空気を楽しんでいた。高台から臨む海に、沈み始めた太陽。波間に吸い込まれゆく光。汐の香りを運ぶ風が、時折私のスカートと髪を揺らす。夜を前にしてオレンジ色に染まる世界は、何にも代えがたいほど美しく輝いていた。伊織さんのお店に行く時は、必ず通る道順。私はこの道をいつも独りで自転車に乗っているけれど、今日は足音が2つ。おろしたばかりのピンク色のミニールと大きなスニーカーが、止む事なく砂利を踏み鳴らしている。慎ちゃんと一緒だと思つと、そんな小さな事でもなおのこと嬉しかったりする。

そうして坂も終わりに近づいて、海なんてすっかり見えなくなった頃。セーラー服を着た女子高生が3人、向かい側から自転車を押してやって来た。楽しそうに会話をしていたのに、私達と通り過ぎる間際、静かになる。

擦れ違った時に感じた視線。ねっとり絡みつく様な、選定の眼差

し。

やがて・・・可憐にはしゃぐ声が後方から聞こえ始めた。慎ちゃんについて噂話をしている事に、私は彼女たちの気配から察した。それを裏付ける様に『かつこいいい！』とか『モデルみたーい』なんて声も聞こえる。その響きはずっと鼓膜を揺らしたまま消える事が無く、余韻を紛らわす為に私はぼりぼりと鼻先を掻いた。

「ねえ、慎ちゃん。」

「なに？」

「今すれ違った女の子達、慎ちゃんの事をカッコイって。」

「ふーん、そう。」

前を向いたまま気の無い返事。予想外の彼の反応に、私は声のボリユームが自然と上がった。

「あらやだ、喜んだりしないの？そういうのって普通、意識したりするでしょう？年代の、可愛い女の子達だったのに。」

すると慎ちゃんは私の発言を聞くや否や立ち止まり、お陰で仲良く繋いでいた手は糸電話の様にぴーんと張った。前のめりになった事で私は振り向き、動かない慎ちゃんに首を傾げた。いきなりどうしたのだろう。慎ちゃんは拗ねてる様子にも、怒っている様子にも見える、そんな曖昧な表情をしていた。

「だったらちーはさ。僕がかっこいいって言われて、嬉しいの？」

はい？嬉しいって、私が？慎ちゃんじゃなくてどうして私が、その質問をされるのかな。よく分からん。

「僕がちーの言う『可愛い女の子達』にかっこいいとか好きって言われて・・・ちーはどう思うのさ。」

口を尖らせて尋ねてくる慎ちゃんを見て、何故だか私も口を尖らせた。もう嫌だ。イライラしてね、電線みたいにすぐに繋がっちゃうんだから。移っちゃうのよ、こういうの。ムスツとしたままの慎ちゃんに、私もムスツとしたまま答える。

「慎ちゃんがかっこいいって言われるのは、もちろん嬉しいよ。何だか自慢に思えるじゃない。だって私の慎ちゃんは素敵なのよって、堂々と認められたって事でしよう？」

そう言うと、慎ちゃんは目を丸くして驚くと、今度は何やら呟き始め、最終的には顔に手のひらを当てそっぽを向いた。何なのよその反応。今度はどうしたの。何で機嫌を損ねたんですか。気持ちが悪くなる変わるお年頃？やっぱり思春期って難しいのね・・・なんて思いつつ、私は伺い知ろうとじっと目を見た。

「いや、ごめん・・・嬉しすぎてつい。どうぞ気にしないで続けて下さい。」

「は・・・？」

「良いよちー、お願い続けて。」

「.....」

意味不明の態度に無言で眉根を寄せていたら、どうぞどうぞと絶妙に目で促された。ちよつとちよつと、なにその仕種は。年下にされるような事じゃないわよね、それって。

「もう、じゃあ続けますけど？うーんとねえ・・・ただ慎ちゃんを好きって言われたら、やっぱりちよつと寂しいよ。何だか慎ちゃん

が離れてしまいそうだし。それはやっぱり本音かな。正直なところ。」

顎に手を当て、考え込むように俯いた。言葉にしてしまえばそれは、ひどく当たり前の事だ。だって慎ちゃんと私は、ただの幼馴染なだけ。私よりも4歳も年下で、しかも夏にしか会えないご近所さんで、裕福なお家のお坊ちゃまで、女の子達がつい振り向いてしまう様な男の子で。それに、それから・・・。

私がしばらく悶々と考えていると

「離れないけど。」

それは呆気ないくらいに自然と、でも今までの謎めいた受け答えとは一線を画してはつきりと、少しの隙も無い完全否定を試みさせた。あまりの潔さに驚いて、足元に落としていた視線を上げる・・・と、至極真剣な顔の慎ちゃんが立っていた。どことなく、漂う雰囲気もさつきとは違ってる。

「僕は絶対に離れない。ちーの傍にいるって、もうずっと前から決める。」

それは私からすれば、夢のような言葉だった。お伽噺みたいに、それは「天上人」に望んではいけない願い。

「だからちーも、忘れないで・・・?」

気付けば目の前に立っていた。慎ちゃんの両手がそつと、私の頬を包む。首を上向きに固定され、まっすぐに刺さる視線。ええっーと。あのう、ちょっと?すごく近いんだけど。近いですよ、慎ちゃ

ん。ちょっと離れませんか。

「ねえ、ちー。僕以外には誰も隣に立たせないって、ここで誓ってよ。」

頬から唇へ、嘘みたいに綺麗な指が滑っていく。女の私よりも美しい指先だ。その動きはとてなめらかで・・・慎ちゃんがピアノストならきつと、鍵盤を流れるこの長い指は映えると思った。きつと音色も素敵だろう。

「ちー、お願い。誓ってくれるよね？」

頬を走るその運指には、どこかしら手慣れた気配を感じた。そして直感する。きつと今までも彼は、こんな風に私以外の誰かの頬に触れている。優しい指先。温もりを吸収する柔らかな皮膚の感触。それを煽る様な慈愛に満ちた瞳に見下ろされながら、私の知らない「彼の記憶」は、確かにそこから流れてきた。感じたくは無かったのに、否応なしに頭をよぎる。

「誓ってくれなきゃ、許さない。」

この時の私はもう、殆ど慎ちゃん言葉など耳には入っていないくて・・・女の子の柔らかさをちゃんと知っている彼の手の動きに、嫌悪感すらも感じていた。知らないものなど要らない。あの頃のままの君だけで良いの。柔らかくって優しくて美しい。穢れを知らない君が好き。傲慢な私はその想いだけを大切に抱え過ぎていて、彼の本心など端から見ると気も無かったのだと思う。「分かったから、もう離れて。」そんな気持ちを込めて横柄に頷くと、それに反して距離は近まり、そして・・・ゼ口になった。

……嘘でしょ？

彼の唇が、確かに触れていた。

恥ずかしながら白状すると、記念すべき(?)彼との最初のキスはこのようにして奪われたのでした。信じられますか？唐突に、脈絡も無く、ほんといきなり奪ったのです。思い返してみても……やっぱり年下のクセにナマイキだと思います。この時の彼の唇の感触など、これっぽっちも覚えていません。だって覚えているのは、思いつきり彼の頬を叩いた右手の痛みだけなんですから。

8・・・甘言（後書き）

とうとう動き始めた年下くん。お姉さんは逃げ切れるのか・・・？

9：赤薔薇のたくらみ（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

9：赤薔薇のたくらみ

ぶるぶると手を震わせながら、私は拳の準備をしている。思いがけない「接触事故」に、すでに報復は一発済ませた。でも足りない。全然気が晴れないし納得できない。いくら慎ちゃんといえども、叱るべき所は叱らなければ。これは大人としての役目だと思う。

「何ですか、今の・・・。」

しょうも無い事を聞きたくは無かった。それにどうせ好奇心だって分かっているし。16歳の少年なら、きつとそういう事に一番興味がある『お年頃』ってやつだ。しかしねえ慎ちゃん、だからと言ってその興味を、向けて良い相手と悪い相手ってというのが居るんですよ。そして私は後者なんです。ちゃんとそこらへん見極めなさい。慎ちゃんほどの容姿の男の子なら、手近に居るっただけで経験値の低い私なんかよりもずっと、相応しい女の子が居るでしょう？こういう事は、釣り合った相手とすべきなのに。

しかし諭そうにも何と言ったら良いか分からず、思考だけがぐるぐると回った。先の見えないトンネル迷路。なんなら白ウサギでも追いかけて、ワンダーランドに潜り込みたい気分だ。

どうしよう、どうしよう。

この時の私の表情は、とんでもなく変だったと思う。眉間の皺と梅干しみたいに皺くちやにすぼめた唇。心ここにあらずな目。どっからどう見ても苦悶の表情。

遊び半分ですって良い事じゃないのよ？

何と言って説き伏せようかと混乱しまくっていた私をよそに、慎ちゃん「あはははっ！」と、いきなり吹き出し、大声で笑い始めた。

「すごい顔してるよ、ちー。」

そして要らない台詞を平気で吐く。何なのよもう！！人の気も知らないで失礼でしょう！？私にさっき叩かれたくせに！頬だつてリンゴみたいに赤くなってるくせに！可愛さあまって憎さ百倍。軽快に笑う少年を見て、怒りのあまり眩暈を覚えたのは言うまでも無い。しかもその姿が小憎たらしいほど絵になるのだから・・・人生って不公平だ。神様のバカ。慎ちゃんは散々笑い倒した揚句、今度は肩にかかる私の髪を、つんつんと引っ張った。一房取っては指先で絡め取る様に巻き付け、さらりと離す。

「誤解しないでよ？言われなくても分かっている。ちーはいつだって・・・僕の事を大事に思ってくれてるって。」

耳の横へと移動した手のひら。親指が何度も何度も、私の頬を撫でる。そのくすぐったさで、心も小さく震動する。ほんと女慣れしちやってる、この子ったら。

「嫌になるくらいちゃんと、分かっている。」

そうしてにつこりと、いつの間にか『身に付けた』らしい、あのキラースマイルをして見せた。それはもう・・・例えようも無くキレイに笑った慎ちゃんに、私の心は急激に凪いでいく。こんな顔を見せられてしまうと、戦う気には一切なれない。どんなに意地悪をされても、ムカムカつと心がささくれだつても、彼の笑顔一つで嘘みたいにそれらは昇華されてしまう。昔からの刷り込み。まるでパ

ブロフの犬のようだ。私はどうやら彼の前では、絶対的に敗者らしい。年上のクセに情けないったらない。

「ごめんね突然、キスしちゃって。」

キス。そうよね、私さつき慎ちゃんにキス、されたんだ。

「……………もうこんな事、しないでちょうだい。」

悔し紛れに俯く私の耳元に、敵は愉悅めいた声で囁いた。

「でも、ほっぺただよ？」

「ど、何処だつて一緒です!!」

場所なんて関係ないわよ。こういう事は、お付き合いする人としなきゃ駄目よ。誤解を招くわ。外国ならまだしも、私達は純然たる日本人でしょうが!

「そんな怒らないでよ。機嫌を直して、ね？」

からかい交じりの目をした慎ちゃん。目の前に彼の左手がまた伸ばされ、動きを止めていた右手を強引に掴んだ。合わさる手のひら。まるで寄せた波が返すように、自然に私達は手を繋ぎ、また歩き出した。さつきまでは不快に思っていたはずの指先の動きも、今では少しの抵抗も無く私は受け入れていた。というより、この状況じゃそうせざるを得なかった。だって拒んだら、意識してるって思われるじゃない。それって悔しいじゃない。負けた気がする。

結局、触れ合いの境界線は曖昧のまま、砂利道に伸びる影は一定の

距離を保ちながらも、同じようにゆらゆらと揺れていた。一見すると元通りの空気。けれども彼が放った小さな棘は、確かに心の奥底を、じわりじわりといたぶり始めていた。そしてその傷も癒えない内に…………彼の唇は頬から別の場所へと移される事になる。

9：赤薔薇のたくらみ（後書き）

まずはほっぺにチュウから（笑）

ちっちゃなトゲほど見えにくくって、取りづらいものです。

100 Shake your hands (前書き)

メニューは話数によって、随時追加します。

10: Shake your hands

「・・・もしかして、彼女に何かした？」

それはちーが席を立った直後のこと。赤くなってるじゃないか・・と、頬を見る伊織さんに指摘を受けた。僕は噴き出しそうになったのを寸での所で抑え、ごくくと喉を鳴らしながらコーヒーを飲んだ。ふう・・。

まずは呼吸をひとつ。わざとらしくゆったりした動作でソーサーの上にカップを置くと、親指で口許を拭う。乾く唇が朱を増して、口の中に広がった苦みのお陰で冷静さも取り戻した。相も変わらずモノトーンカラーのギャルソン着を身に纏い、姿勢良く真つ白な布巾で皿を拭く伊織さんに、僕は目を細めて嗤う。こんな相手を前にすると、僕だって少しカッコつけたくなる。カウンターに肩肘をついて顎を乗せ、足を組み替えた。さあ、試合を始めよう。

「だったらなに？ちーにキスするのに、伊織さんの許可が必要なの？」

皿を拭く手がぴたりと止まった。代わりにほんの少しだけこめかみが動いたのを、僕は見逃さない。伊織さんは無言のまま背を向けると、顔が映りそうなほど綺麗に磨かれた皿を食器棚に戻した。整い過ぎた背中だ。気に食わないくらいに。

「気持ち良くてね。それにすごく・・・柔らかかったよ。」

頬がね・・・とはもちろん言わない。言ったらどうせ、からかいの

ネタで終わってしまう。今きつと伊織さんの頭の中では、色々な想像が膨らんでいるはずだ。顔や首筋、それとも他の場所かもしれない。いずれにせよその場所全てを實現してみせるとはいえ、それは多分、ちーのあの慌てふためき様を見てしまえば・・・悔しいけれどそう簡単には上手くない気がした。

「なあ、シントロー君。」

呼びかけと同時に大きく広げられた布巾が、パシッ！という音を立てて、激しくしなつた。どんなに深い眠りでも、目が覚めるような大きな音だつた。空気を変える破裂音。その行為は、とても皺を伸ばす為だけとは思えない。明らかに苛立ちと牽制を含ませている。伊織さんが振り上げる腕は何度もしなやかに上下して、その度に同じ音が店に響いた。回数を重ねるごとに、まるで獲物を追い立てる銃声の様に聞こえ始める。客は誰も居ない。此処に居るのは僕と伊織さんだけ。

「欲しいからって無理やりは、良くないなあ。」

5回ほど白く波打つたそれは、瞬く間に小さく折りたたまれ、そして腰エプロンのポケットに納められた。

「がつついて顔に傷付けられるような『お子様』に・・・千紗子ちゃんにはあげたくないんだけど？」

伊織さんは振り向いて、細い眼鏡フレームの端を弄つた。眼光の鋭さと同じくらいに、レンズがきらりと光る。

「そうだね。僕は伊織さんよりもずーっと若くて『お子様』だから、自制心なんて効かないんだ。若気の至りってやつでそのまま・・・」

ちーを襲っちゃうかも。」

ピクッ!

あ……。さつきよりもハッキリこめかみが動いた。怒ってるね。伊織さんが凄く、怒ってる。食器棚に背を預け、腕を組む伊織さんはとても格好良い人だ。そりゃあもうムカつくくらいに。コウ兄とはまた別の意味で、僕の憧れの存在だ。

「そんな事してごらんよ。オレは多分……。君を殺しかねないよ？」と笑った口から、白い歯がちらり。出た。これが伊織さんの本性だ。普通笑いながらそんな事言える？コウ兄がオオカミだったら、伊織さんはまるで黒ヒョウみたいな人。くねる尻尾と舌なめずり、優雅で魅惑的に跳ねる肢体。噛み砕いた肉も返り血も、真っ黒な毛で隠してしまう。あーもう、分かるでしょう？見本は大事とよく言うけれど……。小さい頃からこんな人達に囲まれてしまったら、僕の人格形成なんか目も当てられない。歪んでしまうのは当たり前だよ。「社会的」に言うなら僕は、きつと不適格者なのだろうね。実際、同世代の友達にはお前ってちょっと変わってるって言われるしね。でも、別に良いんだよ。特に気にしてない。だって僕は自分のこの性格を、わりと気に入っているのだから。

「もう嫌だなあ伊織さん。僕を殺すなんて……。そんなつまらない事しないでよね？」

ブラックで飲んでいたコーヒーに、少しだけミルクを垂らす。渦を巻く白がすぐに暴れて、変色しては溶けていく。ぐるぐるぐるぐる。とスプーンを回すうち、確かに淹れたはずの白は完全に、黒に侵食されてしまった。いつだって強いモノが勝つ。それがこの世のこと

わりならば。だったら僕は、強くなるしかないじゃないか。そうでしょう？……ねえ、神様。

「僕はね伊織さん。どうせ殺されるのなら、ちーが良いよ。ちーにだったら何をされても、良いと思ってる。」

だってあの可愛らしい指ならきつと、痛みも快楽に変えてしまおうよ。ほら、そう思わない？

「……君は盲目的だな。それに狂っている。」

そうだよ伊織さん。僕は駄々をこねる子供で居られない代わりに、狂気を身に付ける事で肯定したんだ。彼女の傍にいる理由を……誰からも咎められない様にね。

「シンタロー君、オレは始めっから思っていたよ。彼女は君を天使だと言うけれど、それは違う。君は天使の顔をした悪魔だ。」

僕はその言葉が嬉しくて、噛み締める様に苦笑した。マグカップの柄をぐつと右手で強く掴んで、最後の一滴まで飲み干す。美味い。少しだけ舌に甘さを残したのはミルクだ。例え真っ黒でも、ちゃんと白だって活かされてる。僕にもまだ……甘さが少し必要らしい。

「ありがとう伊織さん。伊織さんがそんな風に思ってくれてるなら僕にとってのそれは……最高の褒め言葉だよ。」

今度は伊織さんが笑う。それはあまり見慣れてない、少し寂しさを滲ませた笑みだった。

「シントロー君。」

伊織さんは随分と使い古した気配のマグカップをひとつ取り出し、空っぽになった僕のカップと同様、なみなみとコーヒーを注いだ。

「君もよく知る様に・・・僕は良い男じゃない、君と同種の悪い男だ。だから無差別に偽善を振りまく様な奴よりも、君みたいな意地の悪い子の方が個人的には好ましく思う。けれどもね・・・彼女にはその仮面も必要だと思っているんだ。彼女はああ見えてひどく脆い。だから、彼女を傷を付ける様な手など、これ以上は与えたくない。優しいだけの手があれば良いんだよ、彼女にはね。」

「・・・はい、分かります。」

瞼を閉じて応えた。僕だつて、ちーを悲しませたくない。伊織さんの気持ちは痛いほどよく分かる。それは本当に素直な気持ち。

「そう・・・なら、良しさ。」

カッソつと互いのカップを鳴らして、僕等は目配せをした。乾杯のどを通つていく渋い苦みが、伊織さんの言葉と一緒に脳を刺激していく。それは次の行動を練るのに丁度良い・・・ちりちりと針で突く様な痛みだった。

10: Shake your hands (後書き)

男性陣のやり取りを書くのが、個人的に好きだったりするのです。

11：秘密の花園（前書き）

メニューは話数によって、随時追加します。

11：秘密の花園

早朝5時半。携帯のアラームが盛大に泣きわめいた。メロディーでも何でもない、ただの大きなリズム音。それが私の朝を守ってくれる、忠実なる執事の代わりだ。ぶるぶるぶるとちっちゃな体を揺らして、起きろ起きろと囁し立てる。有能なわりに随分と乱暴な起こし方だけれど・・・まあ、その位でちょうど良い。

・・・うう。

ぼんやりしたまま条件反射に、枕元をゴソゴソと漁った。お仕事の日でも休日でも、私はいつもこの時間に目覚ましをセットしている。自他共に認める朝型人間。庭の手入れや仕込みの準備をしなきゃいけないので、我が家の朝は結構忙しかったりする。もちろんその代わりに寝るのは早くて、10時を過ぎれば私もコウ兄もあくびの連続だ。余程そこらへんのちびっ子よりも、健康的な生活習慣を送ってる。

・・・ねむい。

右に左に伸びをして、ようやく探り当てたケータイのスイッチ。目を閉じたまま、無意識に押した。執事の声が鳴り止む。どうもご苦労様でした。でも・・・起きたくないです・・・眠いんです・・・起きなきゃ・・・もうそろそろ・・・ううーん・・・。

未練たらしくもごろんと寝返りを打ち、手をぎゅっと握る。猫のように喉を鳴らしてみたりして、一応眠気と格闘する。だからといって可愛げなんかはちっともなくて、まるで威嚇するみたいな低い唸り声を上げた。多分それに見合っつてこの寝起き顔は、とんでもなく

ブサイクなこと間違いない。ぱちぱちと瞬きを繰り返して、瞼を指で擦り、カーテンの隙間から漏れる太陽の光を確認する。ああ、どうやら今日も天気は良いらしいですね。のっそりと上半身を起こして、頭をひと搔き。

おはようございます。

壁に向かってぺこんとお辞儀をした。これも欠かさない毎朝の習慣。掛け時計の下に飾ってる絵に対して、私は何よりも先に挨拶をする。今日も頑張りますからね、決意を込めてのご挨拶だ。

足を延ばして前屈したり、腕を上げてぶらぶらとストレッチ。その度、左の足首に付けたアングルレックもシャランと揺れる。それは、小さな星のモチーフが付けられた金の鎖。いかなる時も外さない、私の美しい宝物。

「さて、今日もしっかり働かなくちゃ。」

天井に両手を向けて、ぐーんと伸びをする。緊張と弛緩、しゃんと正される背骨、働き始めた脳。やっと動き出すいつもの自分。

「水撒きしなきゃね。私も庭も、喉がカラカラだよ……。」

ベッドから降りてケータイをテーブルに置くと、私はそのまま部屋を出た。汗を掻いた背中とは対照的に、ひんやりとした廊下が素足にはとても心地良かった。ぺたぺたと音を鳴らしながら、一緒に足首の小さな星も揺れている。

「おはよう、お兄ちゃん。」

キッチンに入ると、そこにはもうすっかりと着替えを済ませた兄の姿。よれたパジャマに跳ねた髪をした、見るからに「寝起きです。」な私とは違って、振り向いた兄はどこまでも爽やかに微笑む。

「おはよう、千紗子。よく眠れたか？」

白シャツを捲り上げた腕が、忙しなく卵を溶いている。

「うーん、それがね。いつもより寝付きが悪くって。」

話すそばからふわぁとあくびが出た。口に手を当てても納まりきれない様な、おっきいやつ。

「へえ・・・珍しいな。」

「そうなんだよねえ。」

コウ兄が首を傾げて、じっと見てくる。

「それ・・・慎太郎のせいかな？」

優しい目が少し細まる。

「慎ちゃん？何で？」

水道水をコップに注ぎ入れ、一気飲みする。ゴクゴクするたび波打つ喉。ああー、やっぱり美味しい。

「・・・別に、何となく。」

そう言ってコウ兄は、目線を手元のボウルに戻して作業を続けた。変なの。質問の意図が掴めないまま、流しにコップを置いて洗面台へ向かう。今度は外側から水分補給だ。汗ばんだ体にシャワーは堪らない。鼻唄交じりにお風呂へ入り、30分後、顔のお手入れをして着替えを済ました。

今度は庭のお世話の番。

腕まくりをして高い位置で髪を結ぶ。さてさて、彼女たちのご機嫌はいかがかしら。右手でぐつとホースを掴み、蛇口を捻った。勢いよく水が飛び出して、私と花々を繋ぐ小さな虹が出来上がる。水浴びを喜んでいるのか、彼女たちはキラキラと光を放って楽しげに揺れた。

ここは私の大切な庭。誰にも侵されない、私だけの世界。どんなに辛い事があっても、誰に非難されたとしても、ここへ逃げ込めば大丈夫。

あんな怖い思いは、もうしたくない。

その一心で作り上げたシエルターは、季節ごとに鮮やかな色を重ねて、私に命の輝きを見せてくれる。その輝きはとても儚くて、けれども容易く奪われてしまう事もあるのだと・・・私は痛いほどに分かっていた。でも、だからこそ、きつと覚えておかなきゃいけない。大切な人が傍を離れぬように。ずっといつまでも、このままの幸せを崩さない為に。

「おとうさん・・・おかあさん・・・。」

小さな呟きは風に攫われ、瞼の奥には鮮烈な青が蘇る。人々を魅了

した「あの少女」の微笑みは今、大好きな両親の代わりにこの家を、静かに見守ってくれている。

12・そして、もう1人。(前書き)

メニューは話数によって、随時追加します。

12:そして、もう1人。

慎ちゃんが帰って来てから、1週間ぐらい経った。

日中は仕事があるので殆ど顔を合わせないけれど、互いの家で夕ご飯を食べたり、休日にはお出掛けしたりしながら、出来る限りは一緒に過ごしていた。待ち望んでいた楽しい日々。大好きな人が近くに居る幸せ。その想いをしっかりと噛み締めながら、私は飽きることなく慎ちゃんと同じ時間を共有していた。

そんな風に年甲斐も無く浮かれていたから、きっとバチが当たったんだろう。

閉店間際の店の中。私はその日、慎ちゃんと花火をしよう！なんて暢気に考えていた。コウ兄も既に食材チェックの為に奥に引っ込んでいて、フロアには私一人。店内の片付けに取り組むかわら、時計とにらめっこをしていた。

あと15分で閉店。

待ち遠しさにそわそわする中、私達を波乱へと陥れる全ては……
……そのドアベルの響きから始まった。祝福を告げる6時の鐘よりも先だったのが、不幸の原因に違いない。

ああ……。神様ってどうしてこんなにも意地悪なのだろう？安寧を望む人の前にも、必ずや試練をお与えになる。それも並大抵のやつじゃなくって、全身がぐらつくようなハードな試練を。要らないですから。越えられませんかよそんな高い壁。直接そう訴えかけた所で、本当に安寧を叶えて下さるのだろうか。

チリリンつとベルが鳴ってドアが開いた時、私はがっくりと肩を落とした。ギリギリの時間には来ないで〜！なんて正直なところ思いつつ、文句を喉の奥に無理やり閉じ込める。必殺技の愛想笑いを張り付けた。抜かりはない、そう確信してから振り向いた。

「申し訳ありません、お店はもう・・・」

締める時間なんです。言うはずだった常套句は、来店したお客さんを見た瞬間に消えた。

「ちい。」

しばらく聞いていなかった声なのに、どうしてか耳には簡単に馴染んだ。終わらせたと思っていたのに、本当は心の奥底ですつと、ずつと引つ掛かっていた声。かさぶたになつては引つ搔いて血を滲ませ、いつまで経っても消えない痕を残した。その繰り返し、私と彼の思い出。センチメンタルとは程遠く・・・生々しい痛みを伴った現実。ぐつと締めつけられる心と、そらしたいのにそらせない瞳頭をもたげて迫ってくる、私の初恋だ。

「久しぶり、ちい。」

もう嫌だ。どうして私はいつもこう・・・。

もともと長い彼の『コンパス』が、一歩ずつこちらへと針を落とす。コツ、コツと革靴が鳴って、身動きの取れない私をどんどん追い詰めていく。どうしようもなく焦っていた。逃げなきゃいけないと分かっていた。このままじゃ籠の鳥になる。羽をもがれて捕まってしまう。流される、取り込まれる。それが手に取る様に分かっているのに、彼が近づくの待っている自分もちゃんと居て、いい加減う

んざりする。どうして今更。疑問を後押しするかの様に、靴下の中に隠された鎖も、ざらりと揺れた。

「お客様！」

その空気から救ってくれたのは、お兄ちゃんだった。いつの間につちへ来たのか、腕を組んで鋭く彼を睨んでいる。ただならぬ気配を察知したのは、きつと本能だろう。

「閉店です、お帰り下さい。」

お兄ちゃんはカウンターから、らしくもなく冷たい声音を吐き出した。

「聞こえませんでしたか？閉店だと申し上げたんですが。」

喧嘩腰の口調。けれどもそれは当然だ。コウ兄はこの人を、ずっといい様には思っていないかった。普段温厚なお兄ちゃんが、この人の前ではいつだって仏頂面で会話をしていたし、わざと私から遠ざける様な事も平気でやった。どうしてよりによってアイツなのかと、直接否定された事もあったほどだ。

重苦しい沈黙の後、彼が言った。

「構いませんよ？お店は締めて頂いて結構です。」

ちつとも変わらない不遜な笑み。確かにコウ兄に対して言ってるはずなのに、肝心のコウ兄には目もくれない。ただひたすらに、私だけを見下ろしてくる。その痛いくらいの視線に囚われるだけで苦しみの、今まで見た事無い、スーツにネクタイというすっかり大人

の男然とした彼の格好に、私の脈は当然ながら早まっていた。傍から見ても分かる仕立ての良いスーツ。育ちの良さが滲み出ている、整った容姿。きっと今でも、モテるんだろう。もう関係は無いはずなのに、彼の前に立つと自然とあの頃の卑屈さが蘇ってくる。私を見てほくそ笑む、沢山の女性の影も。

「食事に来たわけじゃない。」

近付いてきた彼は私の頭に手を置くと、後頭部を優しく撫で、すーっと首筋へと下ろしていった。大きな掌がうなじに触れ、冷たい手が甘い痺れをもたらす。あっ・・と声が漏れそうになるのを、唇を噛んで必死に耐えた。私をよく知る、このいやらしい手が憎い。

「こちらの従業員さんに、用事があるんだ。」

もう一方の手で私の腕を引っ張ったかと思うと、そのまま抱えるように肩に手を回し、駆けだした。抵抗する間も与えないほどに強引に、店を飛び出す。コウ兄が呼び止める声は完全に無視して、店の前に停まっている車の助手席に私を押し込んだ。ボタンつとドアが閉じられ、彼もすぐさま運転席に座り、エンジンを掛ける。

「行くよ、ちい。」

それを合図にアクセルを踏むと、体がぐっと後ろに引っ張られる様に加速した。颯爽と流れていく景色。この地に似つかわしくない轟音が風を切る。

ああ、何てついてない日だろう。私はただ慎ちゃんと、穏やかに過ごせばそれで良いのに。そう言えば今日の占い、最悪だったもん。ほんとに当たっちゃったよ。だって確か年上の人に振り回されるっ

て、テレビでお姉さんが言った気がするし……。

緊張と諦念の狭間をグラつきながら、車窓の風景をただ見つめた。それでもしないと、自分が保てなくなりそうだった。だって私は、あの頃から少しも成長していないもの。

「黙って無いで、何か喋りなさい。」

ほらね、例えば彼が私を甘やかすだけで……

「声が聞きたいんだよ。聞かせて、ちい。」

息すらまともに来なくなってしまうのだから。

13・過去からの使者(前書き)

メニューは話数によって、随時追加します。

13：過去からの使者

恋をすると、人は愚かになる。

そんなものは偽りだと思っていたのに、この人に会ってからの私はまさに、その言葉通りだった。たぶん初めて会った時から私は、彼に心を奪われていたし、彼とそういう関係になるのだって、さほど時間は掛からなかった。

きつと熱に浮かされていたのだろう。

恋の知らない初心な娘が、軟派な男に落ちるなんて話・・・よくある事だ。面白味も何も無い。人ごとの様にそう思えても、現実の私はとても苦しんだ。私は全てを捧げているのに、どうしてあなたはそうじゃないの？隣にはいつも見知らぬ誰かの存在があって、しかも私より格段に美しい人種。敵う筈も無く、追いつけるわけも無い。だから私は大人しく、あなたが伸ばす手を握り返すだけだったよね。それがどれだけ辛かったのか・・・あなたは知ろうともしなかった。

「ちい、何を考えている？」

夜の近付いた山道。鬱蒼と茂る背の高い木々の根元を、ヘッドライトが煌々と照らしている。私達は会話らしい会話もせず、隣同士に座ったまま、ただ時間だけを持て余していた。微かに鼻を刺激する、煙草の香り。それは私の知らない彼の匂い。何度かこの車にも乗った事があるけれど、煙草の香りを感じた事は無かった。あれから吸う様になったのかも知れない。視線をずらして灰皿を見る。けれども、その気配は全く無かった。少しの違和感。

ああ、なるほど。

そしてすぐに悟って、自嘲する。この香りはきつと彼のものじゃ無く、ただ単に移っただけなのだ。その体に、その見目麗しいスーツに、誰かの残り香が漂っているだけ。その瞬間、一気に目が覚めた気がした。すくと全部が、符に落ちていく。

だから私は恋が嫌いだ。

「……………千景くんは、変わっていないんだね。」

ぼそりと呟いたその真意を、果たして彼は汲み取れただろうか。
・
・
・
ううん、きつと無理だ。女の気持は敏感に察知するくせに、私の心になると、どうしてもその能力を発揮してくれない。

「ちいは、変ったな。健斗の言うとおり綺麗になった。」

膝に置かれた両手を、彼がそつと上から包む。その薬指には何もなかった。痕も、付いてない。言葉にするのも何だか億劫で、額の皺だけが深くなる。

「ずっと会えなくて、悪かったよ。」

悪かったですって？

さすがの私もカチンときて、彼の手をさつと振り払った。奥歯を噛んで彼を睨みつける。会えなくて悪かった？何なのそれ。悪いって何が？私がいつまでもあなたを想っていると、待っていたってそう思ってたわけ！？

「ちい、ここに戻ったのはお前に話が合って」

「やめてよ。私は千景くと話なんてしたくない。もう遅いのよ。私はあの時に話して欲しかったのに、何も言わずに居なくなったのは千景くんでしょ。そういう事されるのが一番嫌って知ってるくせに、あなたはそれをした。だからもう無理。これ以上は付き合いきれない。千景くんの傍に居たくないの。」

一般車よりも随分と広いこの車で、それでも居心地の悪さを感じながら、私はハッキリと否定した。千景くんは昔の恋人。もう2度と会ってはいけない人。だからそんな風に何かを繋げ直そうとしても、私は言葉を否定する。そうするしかない。……だって、あなたはもう。

「愛してるのに?」

とくつと小さな針が胸の真ん中を差して、血が騒ぎだす。

「誰よりもお前を見てきた。お前の全部を知ってるのは俺だけ、そうだろう?」

体を傾けて、両手で私の顔を上げる。

「忘れたくないんだ。ちいが凄く……好きだから。」

吐き出す息は飲み込まれ、唇と唇が触れ合った。ふわりと軽い交わりの後、すぐに離れる。

「他の女とキスしても、何も感じない。」

2人きりなのに、どうして耳元で囁くの。

「気持ちが良いのはちいだけなんだ。」

ぬるりと差し込まれた舌が、耳を撫る。ビクツと身じろぐ身体。彼は私を逃がすまいとシートに腕を強く押し付けた。不自然な体勢、それでも顔だけは向かい合う。

「俺を信じてくれないのは何故？」

千景くんは卑怯者だ。ずるくて聡くて厭らしい、私をいたぶる天才だ。

「お前はずっと、誤解してる。」

「……誤解？」

「そう、俺はちゃんと言った筈だ。俺は立場上色々な女を知っているけれど、お前みたいなのは初めてだって。その意味をちいは、少しも理解してくれてない。」

「馬鹿げてるわ。可笑しいのは千景くんじゃない。それに意味があるのなら、ただ物珍しいだけでしょう？懐いた動物と同じ感覚。確かに私みたいな一般人、あなたの周りには居ないもの。」

「違う、そうじゃなくて……」

「千景くん！何にしたってね、私はもうあなたと会うつつもりは無いの。あなたを待つ事も……もう出来ない。」

視線を先に逸らしたのは、千景くんだった。そつと腕が離れ、運転席に深く沈みこむ。項垂れた顔と伏せた睫毛。その奥に見えた瞳が、傷付いた様に少しだけ揺れた。はつと息を飲む。長い間彼と一緒に居たけれど、そんな仕種を見たのは初めてな気がした。

「あいつの事は待てるのに、俺は待てないのか。」

・・・え？

「いや、何でもない。悪かったな。すっかり暗くなってる・・・帰ろう。」

ハンドルを握りアクセルを踏む。動き出した車体はゆっくりと、家路へ向かい走りだした。見慣れた場所なのに、行きと帰りでは全然違う景色に見えた。きつと日が暮れたからだ・・・思い込むようにして目を閉じた。これ以上は何も、考えたくなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4302/>

ティータイム

2011年8月11日11時57分発行